

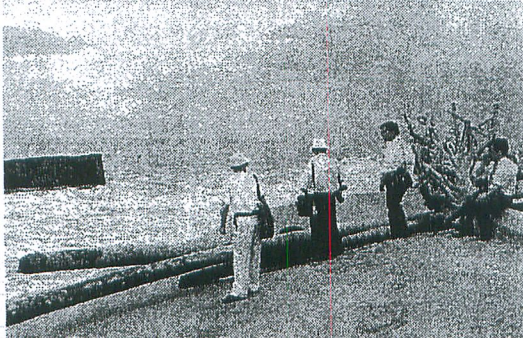


# アジアの涙

## 追体験の旅 マレーシア

四人はタイ国境に近いマレーシア東海岸の北端のマチ、コタバルから証言聞き取りを開始した。三〇度を超し、太陽が照りつけている。開戦地からスタートしたのは追体験の始まりにふさわしいと思っただからだ。一九四一年にここまでタイムスリップできるのか。

最初の証言者である中国系の丘中鶴(クワン・チュンコク)さん(右)は繁華街にある事務所で待っていた。天井の大き



### 1 消えるトーチカ

な扇風機が回っていた。抗日運動にかかわっていた丘さん(右)の父親は、日本軍上陸後、家族を連れ小島に逃げたが、日本軍憲兵に見つかり殺された。どんな時間を受けても仲間の名前はいわなかったという。丘さんは静かに言葉を選んだ。イギリスの統治で

## 上陸の浜 浸食が進み……

の維持を理由に容赦ない粛清を行っていた。ヤシの木が南国情緒をかもし出す、どこか浜辺という連想は見事に裏切られた。林さんの話では浸食は急速に進み、砂浜が消失しているらしい。戦争の跡を唯一とめるイギリス軍が日本軍の上陸阻止に設けたトーチカ(要塞)も波をかぶり、海に沈みこんでいた。

以来「語り継ぐことは自分の責務」と自分に言い聞かせてきた。近くのマチで小学校校長を務めている。「若い世代に伝えるのは私の仕事。歴史の事実を知ってもらう日本人にはできる限り力を貸したい」と話してくれた。

それはアジアの戦争被害者の深い悲しみを知る旅だった。四月二十八日から五月八日まで、札幌の市民サークル・札幌郷土を掘る会(石田国夫代表)が派遣した四人のアジア・太平洋調査団(同行した。マレーシア、シンガポール、香港)に日本軍による住民虐殺の生存者から伝説的な「私の戦後史」を聞いた。思わぬ魂が揺さぶられた。追体験の旅は次々と墓碑に線香を添える供養の旅でもあった。汗をぬぐい、聞き取りに明け暮れた四人の胸に去来したものは何か。平和を祈りながら報告する。(守谷 久記稿)

## 札幌郷土を掘る会・調査団に同行 被害者の肉声、えぐる旅に

た古部屋労働朝鮮人強制連行、戦争反対者への弾圧、戦争体験などをテーマに歴史の検証に記録集六巻をまとめた。

戦後五十年の今年には、アジア・太平洋戦争の被害者の肉声を掘り起こすことに決めた。あの戦争はハワイ真珠湾奇襲で始まったと思っている人が多いが、マレー半島コタバル上陸の方が二時間早く早かった。一九四一年(昭和十六年)十月八日、開戦と同時に日本軍はイギリス領だったマレー半島と香港、そしてアメリカ領だったフィリピン攻略の大作戦を開始。マレー半島では各地で「潔清」の名の下に中国系住民約十万人の虐殺が行われたという。日本軍は抗日運動の芽を摘むため、多くの子供たちの命までも奪った。また香港をはじめ日本軍が大量発行した軍票は、住民に窮乏を押し付けた。



抗日運動に加わり、非業の死を遂げた父親の墓前に立つ林輝燾さんらと「福隆山」という中華義山(中国系住民の墓地)があった。ここにはコタバル周辺で捕らえられ殺害された華僑の霊を弔う碑が立ち並んでいる。……小学三年生を受け持つ原田さんは自分の目で、耳で、皮膚で戦争の悲惨さを感じ、教養子に話したいと思っている。一九九三年(平成五年)の夏、家族でハワイの真珠湾も見えてきた。出発前の学校通信には「次代を担う子供たちに何を教えたらいのかを調査してきます」と記した。「このまま風化させてはならない」。コタバルから南下、車を走

## 私の戦後史

この企画を執心するのは感謝をお寄せください。フックスーイ。210・5607が郵便で住所、氏名、年齢、職業、電話番号を書き、〒060・91札幌市中央区大通西二北海道新聞生活部まで